

地域の誇りをつなぐまちづくり

伊勢市長(三重県)

鈴木健一



はじめに

伊勢市は、平成17年(2005年)11月に、古くから神宮にゆかり深い歴史を共有してきた旧伊勢市、旧二見町、旧小俣町、旧御園村の1市2町1村の新設合併により、誕生した。

その地勢は、北は伊勢湾に面し、中央に県内最大の河川である清流宮川や五十鈴川、勢田川が流れ、東から南にかけては、朝熊岳、神路山、前山、鷲嶺が連なり、西には大仏山丘陵が広がる緑豊かなまちであり、伊勢志摩国立公園の玄関口でもある。

神宮と参宮街道

伊勢のまちは、古くから「お伊勢さん」「日本人の心のふるさと」

と呼び親しまれてきた神宮ご鎮座のまちとして栄え、「おかげ参り」が流行した江戸時代には、当時の



歌川広重「伊勢参宮 宮川の渡し」

日本人の6人に1人が伊勢を訪れたと言われ、「伊勢に行きたい伊勢路がみたい、せめて一生に一度でも」と伊勢音頭に唄われているように伊勢参りは多くの人々の憧れであった。

当時の伊勢国には江戸方面からの参拝客が利用する伊勢街道、上方方面からの参拝客が利用する伊勢本街道、初瀬街道、伊賀街道、熊野詣での巡礼者が利用する熊野街道など多くの街道があり、それらは参宮街道として神宮へと続いていた。

全国各地より神宮を目指して、大勢の人々が訪れたことで、情報が集積し、独自の文化が形成され、人々の間にはさまざまな交流が生まれた。この交流の歴史が、都市としての中心性を高め、多様

な活動の場をつくり、市民の「おもてなしの心」を育て、現在の伊勢市の姿がある。

日本全国から伊勢の地を目指した幾千万の旅人は、道中に手早く食べられ腹持ちがよいお餅を好んで食べたといわれ、桑名から伊勢までの参宮街道は別名「餅街道」と



おはらい町のまちなみ

も呼ばれ、道中食として親しまれた名物餅があり、現在も本市では多くの店で楽しむことができる。

また、本市では街道沿いの地域の歴史的資産を生かし、残し、伝え、次世代に引き継ぐ「市民主体のまちづくり」活動が行われ、内宮の鳥居前町としてまちなみを再生した「おはらい町」もその代表的な一つである。伊勢特有の切り妻や入母屋造りで妻入り様式の家屋が並び、土産物店や銘菓の老舗、食事処が軒を連ねている。

神宮への参拝客を相手とする商業などが大いにぎわった参宮街道には、今もその面影が随所に残っている。



旧御師丸岡宗大夫邸

その他、全国からお伊勢参りに来ていただく仕組みを構築した「御師」邸の保全活用などの取組が行われている。「御師」とは、全国の崇敬者に大麻（お札）や曆（伊勢曆）を配ったり、参拝者を自邸に宿泊させて、そこで神楽をあげ、翌日参拝の案内をしたりしたもので、明治4年に廃止されたが、それまで多くの参拝客を迎え伊勢のまちの隆盛に貢献した。

こうして神宮とともに歴史を刻んできたまちなみや民俗行事、風習などが息づき、それらが他のまちとの違いを生み出し、まちの「誇り」として培われている。

課題とこれから

伊勢市固有の有形・無形の歴史的・文化的資産は、長い歴史の中で連綿と培われてきた祖先の営みを知り、現在・未来に伝える貴重な財産であり、それらがまちのイメージを作り、人を惹きつける魅力となっているが、少子高齢化、生活様式の変化、価値観の多様化などにより、継承への不安の声が聞かれる。

本市の誇る歴史・文化を後世に伝え、国内外にその価値を広く浸

透させるために、歴史的・文化的資産の保存・継承を進めるとともに、市民がその価値をより深く理解し、市民の共有財産としての愛着と誇りをはぐくんできていけるよう、教育や啓発に努めることが必要である。

積極的な取組が求められている。常に原点に立ち帰りながら、絶えず新たに生まれ変わり続ける神宮の式年遷宮のように、先人から受け継いだこの豊穡の地を次世代へつなぎ、これからも国内外に親しまれるとともに、市民がまちへの誇りと愛着を持ち続け、将来にわたって住み続けたいと思えるまちづくりに取り組んでいきたい。

一口メモ

伊勢参宮街道 街道と宿場町

道者と呼ばれる伊勢神宮への参宮者たちが通った本街道や別街道、南街道、初瀬街道を総称して伊勢参宮街道（伊勢街道）といった。

道筋でいうと、東海道から日永追分に分かれる本街道、関から南下する別街道、大和（奈良）息からの初瀬街道・南街道があった。

一般民衆の伊勢神宮参詣は、中世紀以降行われるようになり、江戸時代には庶民の慰安としておおいに隆盛。参宮者（道者）は、平常の年でも年間30万人から40万人を数えたという。また、豊作の年などは参宮者が増えるなど、伊勢街道の往来は地方経済と密接に結びついていた。



企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」